

本日の学び テーマ:「幼子や乳飲み子たちの賛美」 テキスト:マタイ21章12節-17節

【理解の手がかりとして】

今課のテキストは、イエス様がエルサレムに入城されたすぐ後の出来事、いわゆる「宮きよめ」と呼ばれる出来事である。イエス様は「売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された」(21:12)のであった。

ヨハネ福音書はもっと詳しく「神殿の境内で牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちをご覧になった。イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。『このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。』」(ヨハネ 2:14-16)と記し、マルコ福音書は「また、境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった」(マルコ 11:16)と記している。※ルカ福音書はマタイ福音書よりもシンプルな記述。

これらのことが行われていたのは、神殿域の最も広い区域であり、ここまでは異邦人も入れるが、順次中心に近づくにつれ「(ユダヤ人の)女性の庭」「(ユダヤ人の)男性の庭」「聖所」「至聖所」と区域分けされていて、入れる者が制限されるようになっていた。

そこで羊、牛、鳩を売っていたのは、遠方からの参礼者が犠牲をささげるためのものであった。両替人がいたのは、神殿にささげるためには、規定の貨幣でなくてはならなかったからである。ほとんどの参礼者は、長旅を経てエルサレムに来ており、ささげものの動物を売る人々や両替人は、当時の神殿礼拝において必要不可欠であった。

ではなぜイエス様は、彼らに対して怒りを表されたのか。それは、動物(供犠)の売買人が、参礼者から巨利を占めていたからであろう。高値で買われた犠牲は奉献されると、一部は屠殺され、余剰分は売却されたという(屠殺されないまま再び商人のもとに卸されるものも少なくなかったらしい)。このような搾取の構造の中に両替人もあり、それを指してイエス様は「強盗の巢」と咎めたのであろう。

続く 14 節以降の記事はマタイ福音書特有の記事である。その「宮きよめ」の境内にて、イエス様のもとに寄り集まってきたのは「目の見えない人や足の不自由な人たち」(21:14)であった。彼らはどこから来たのか、…実は彼らは以前から神殿にいた、と考えられる。ではどこにいたのか。

使徒言行録 3 章に、ペトロヨハネが足の不自由な男を立ち上がらせる出来事が記録されている(3:1-10)。その中でその男は「毎日『美しい門』という神殿の門のそばに置いてもらっていた」(3:2)とある。「美しい門」とは、神殿の外庭である異邦人の庭から女性の庭に入るところにある門で、その門を通れるのはユダヤ人だけであった。礼拝する者はそこを通らねばならず、したがって施しを乞うには絶好の場所であった。また施しのみならず、身体のいやしを祈り求めるために来ていた者もあったに違いないと思われる。

一方では、神殿犠牲の売買や両替による搾取(悪しき経済活動)がはびこっており、そのそば(片隅)には、日々困窮して生きている人々の現実があったのである。しかしイエス様がそこに立たれたとき、まさにその「宮」は「きよめ」られるのである。「神殿に満ちていた偽りの神聖が払われるとともに、真に救いを求める者を呼び集めたまう。主イエスがそこにいたまうからである。それまでは、神殿の片隅

に、しかも世の人々の意識にとっては、片隅にさえなかったかもしれないような彼らが、今そこにもっぱら自分たちを呼び、いやし、救うかたを見、知ったのである。神殿という神と人とが最もあらわに向かい合う所で、彼らが主イエスのもとに歩みだしてきたのは、この新しい力を感じ得たからである。」(大沼上)

さて、祭司長たちや律法学者たち(神殿の権力側)は当惑する。それら一連のイエスの行動を受け、「子供たちまで叫んで『ダビデの子にホサナ』と言うのを聞いて」(21:15)立腹した。前段のエルサレム入城の際に、「イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ』」(21:9)と叫んだ「群衆」がいた。そのイエス賛美が「子供たちまで」広がった、その事態を受けて、権力者たちが戸惑うのである。彼らは言う。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか」(21:16)と。これは「叫ぶのを止めさせろ！」である。

それに対してイエス様は、詩編の言葉で切り返される。「天に輝くあなたの威光をたたえます。幼子、乳飲み子の口によって」(詩編 8:2b-3a)という一節をもって。祭司や律法学者らがこの詩を知らないはずがなく、「まだ読んだことがないのか」(21:16)とは彼らに対する大いなる皮肉である。——「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」(マタイ 19:14)——神に向かう純粋さ(真心)、それが「子供たち」の姿であろう。それは「目の見えない人や足の不自由な人たち」に通じるイエス様への姿勢である。

「皆さんの国でどんな機関が腐敗して、本来それが作られた目的とは正反対の目的を果たすようになっていますか。本当は人々に礼拝や祈りの場を提供できるはずの組織が、今やイエスの教えとは正反対の方向を向いていることはないでしょうか。私たちにできることはなんでしょうか。」(N.T.ライト新約聖書講解 2『すべての人のためのマタイ福音書 2』)——「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」(21:13)

【聖書教育より】

「イエスさまの死により。神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた事(マタイ 27:51)は、神殿は誰でもが神さまを礼拝できる、まさに『祈りの家』となった事を表していると思います。開かれた教会、誰でもが集える教会を私たちは願います。」(大人クラス)